

悩める魔女思想

よもぎ

「いろいろな薬草の成分を調べたけど、やっぱりローズマリーのエキスが一番効くみたい。」
「そうでしょ。そうでしょ。実を言うと母さんもローズマリーのエキスを使ったのよ。」
「だったら最初っから教えてくれればいいのに。一週間は無駄にしないで済んだわ。」
「一応これも試験の内だからね。魔女になるためには一度は通らなきゃいけない試練。これも親心よ。」

「親心、ね……」

あたしはうさんくさげに母さんの顔を見つめた。

うさんくさいのは母さんだけではない。今あたしが居るこの場所、わずか6畳くらいのせまっ苦しいスペースの中央には、不釣り合いなほど大きな釜戸があり、天井からこれまた大きな古びた釜が吊り下げられていた。窓は一つもなく、明かりといたら裸電球一個だけ。今にも壊れそうな壁付けの棚に陳列されたビンの中の、アルコール漬にされ動植物の区別すらつかないものが、裸電球の橙色の光に照り返され不気味に浮かび上がっていた。聞いただけでもうさんくさい部屋でしょう。

ここは我が月城《つきじょう》家の秘密の地下室。許された者のみが入ることのできる特別な部屋である。許された者とはつまり、魔女になるべく者のこと。つまり、あたしは魔女ってこと。（まだ未満なんだけど）

現在では魔女は申請式になっていて、協会が認定した資格試験のうち、最低でも3つの資格を取得しなければ、正式な魔女として申請できない決まりになっている。魔女社会もなかなかシビアな世界なのだ。

魔女協会が認定した資格試験は数え切れないくらいあるが、中でも代表的なのが、今度あたしが受けようとしている『魔薬調合調剤師』。似たようなもので『毒物取扱師』や『解毒剤調合師』なんてものもあり、ポピュラーなところでは『占い師』なんて（魔女じゃなくても取れそうな）資格もある。

未だかつて誰も取得したことのない幻の資格なんてものもあるのよ。その名も『魔女の膏薬《こうやく》調剤師』。

『魔女の膏薬』とは、ほうきに塗れば空を飛ぶことができるという、夢のような、伝説の薬のこと。残念なことに現在居る魔女の中に『魔女の膏薬』を調合できる魔女は一人も居ないけど。

みんなの心の中に思い描かれるほうきにまたがり空を飛ぶ魔女は、今や物語の中でしか存在しないのだ。

あたしはそのことをとても残念に思っている。

ともあれ、まずは眼前に迫る試験に合格して、魔女の申請をしなければ、あたしの魔女としての人生は始まらない。

あたしは大きな釜戸に火を入れた。

「それじゃ母さん、あたしはこれから課題の薬の仕上げに取りかかるけど、手伝う気がないのなら出て行ってよ。気が散るから。」

口をとがらせてあたしが言うと、母さんは「はいはい」と言って地下室の階段を上っていった

。

上の部屋へと続くドアの前で母さんはふと立ち止まると、あたしを振り返った。

「そうそう、言い忘れたけど、課題を提出する前は必ず試さないダメよ。ホレ薬は効かなきゃ意味がないんだからね。」

念を押すような言い方にあたしはむっとした表情で母を睨んだ。

「そんなこと言われなくたって分かってる！」

母さんはやれやれといった感じで軽く手を上げてみせて、今度こそ地下室から出て行った。

まったく、母さんには娘を思いやる心ってものがないのかしら。いくら試験だからって、少しくらい手伝ってくれてもいいのに。誰にばれるわけでもないのにさ。

母さんの消えていったドアに向かって、あたしは舌を出してみせた。

なべの中では黒っぽい液体がぐつぐつと煮えはじめてきていた。

三日三晩煮続けて成分の濃厚になったものを、さらに五日五晩寝かしておく。そうして出来上がったホレ薬の素に、月の光だけで乾燥させたオトギリソウと、 マートルの枝をささがきにしたものを放り込み、薄紫の湯気が出るまで煮つづける。長さ一メートルものヘラで底のほうを持ち上げるようにしてかき混ぜること 一時間。

「さて、それではローズマリーを摘みに行くとしますか。」

釜戸の火を細くしてから、あたしは薬草摘み用の手かごを持って秘密の地下室を後にした。